

え。」と、藝妓らしい女達に押されて、奈落の底へでも陥込んで行くやうな心地で、澁々一座に列つた其の最初こそ、テ、臭く思つて、碌々顔も得上げず、隅の方にかしこまつてゐたが、思つたよりも意外に捌けた柔かな男の私に見せる笑顔と、氣輕な隔意の無い女將や藝妓らしい女達の噪いだ待遇振りに、いつか針の簾に坐つてゐるやうな結ばれた私の感情も溶けて了ひ、侷められるまゝ、たはいもなく酒杯の數を重ねた。

私よりも先に上座へ澄した面容をして腰を据ゑた三作は、側にゐた山出しのやうな、例の拳の相手をしてゐた藝妓に擲擧ひながら、盛んに酒杯の數を重ねてゐたが、漸次に一座が亂れて來ると、酒に酔つた天火のやうな眞赧な顔を見せて、面白さう

に、

『さあ龜吉君、一杯受け給へ。』と、いよ／＼浮かれ出した。

『ハ、ハ、ハ、ハ、また龜吉ツてんですかい。何うも、それにや恐れ入りますよ。——だが、しかし、其の手でやられちや、眞個反抗が出来なくつて、降参するより仕方がありませんからねえ。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。』

男は、賑やかに笑ひながら酒杯を受けた。

『何に、龜吉だから、龜吉君と呼ぶんさ。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。だがまあ可いから、早くあげ給へ。』

『だつて、それだけは、もう好加減に御容赦が願ひたいですなあ。——騒々しく言つて、御迷惑をかけた罪は謝してゐるんですか



ら、ハ、ハハハ、』と、笑ひながら、  
『ねえ、さうでせう。真個この方のやうな奇抜な苛め方にや、  
奈何な僕も最初は面を喰ひましたよ、ハ、ハハハ、。——しかし  
まあ何もありませんけど、お昵懇のしるしですから、何卒御遠  
慮なく。……さあ熱いのが来ました一杯いませう。』と、抜目の  
ない調子で、私に酒杯を侷める。  
『イヤ真個この男の馬鹿にや、僕も一方ならぬ迷惑をしてるん  
です、ハ、ハハハ、。』  
私は、仕方なく頭を掻いて、三作の顔を平ロく眺めながら  
テレ隠しに笑つてゐると、一座の藝妓らしい女達も轉げるやう  
に笑ひ出した。

『さあ、も一つお重ねやすな——まあ、何ごすのえ、ホ、ホ、  
、』  
と、側の細面なのが、女中の新しく運んで来た銚子を取上げ  
て、また白い手で酌をする。  
そして、呑み乾す間もなく、三作と私の前へ、また幾つとな  
しに酒杯が舞込んで来て、例の男の横に座を占めてゐた薄い眉  
のが、酒に浮かされたやう、微紅染つた鮮やかな頬の色を見せ  
て、口三味線で何か低聲で歌ひ出すと、沈みかけた一座は、急  
に浮きあがつて、額の短い例の男も、箸取つて前に並んだ御馳  
走を喰ひ荒してゐた三作も、愉快さうに手拍子を取つて騒ぎ出  
した。それにつれて山出しのやうなものも、共に騒いで見たいと



言つたやうに黄ろい肝聲を振絞つて歌ひ出す。座は自然に湧きあがる。――

胸苦しいほど酔ッばらつた私は、罪もなく騒ぎ出した一座の人々の顔を興味ありげに眺めながら、縁もゆかりも知い一面識の男に、飛んだ御馳走になつたものだ、と譯けもなく、これも謂は、旅行の興へる興趣の一つだと微笑んで、侷められるまゝ側の細面なのや、女將らしいのに酌されては、尙も我を忘れて單り酒杯を傾けてゐた。

が、如何したとであらう。自分では餘りに呑んだやうにも思はないのに、悪酔したもののか、漸次に耐らないほど胸苦しくなつて、いつにない嘔氣を催ふして來たから、便所へ行かうと立

ちかけたが、急に頭がふらついて、立つとが出来なかつた。

『あ、悪酔おしやしたんやわ。――水を持って來てお上げ。私の清快丸を上げるよつて……。』

と、酔倒れた私の背を擦つて呉れる細面の耳近く叫ぶ聲が遠くに聴えた。

渴を覚えて偶と目醒めると、耳許に聴えてゐた騒ぎはいつの間にか静まつてゐて、四圍には誰の姿も見えないのみか、天井より吊された電燈の灯は、薄く暮れた八疊の座敷を眩く照してゐた。



「オヤ、如何したんだらう？」

と、思はず呟いて、重い頭を擡げながら、まだ夢を見てゐるやうな心地で、綺麗に片附けられた四圍をキヨロ〜と奇異さうに胸すく、草花の生けた床柱の前に三作が私と同じやうな毛布を被て酔潰れたやうに睡つてゐる。

で、直ぐ私は、私達が酔潰れて前後も知らずに睡つて了つたから、男の一行は、もう歸つたのであらう、と思つて、これや飛んでもない失禮をしたものだ、と悔ながらも、まだ暫時狐に騙まれたやうに、キヨロ〜と四圍を胸してゐた。

「オイ、も起き給へ。え、オイ！」

我にかへつた私は、兎に角三作を起して、歸る仕度をしやう

と、進み寄りながら揺つた。

が、「うむ、うむ。」と、首肯のみで、更に起きやうとしないので、私は、腹立たしげに、

「オイ、起き給へつたら。——もう歸るんだよ！ え、君！」と強く揺りながら、耳近く大きく叫んだ。

すると三作は、寝呆けたやうな、妙な眼の色を見せて、欠伸をしながら、澁々起き上がった。

「よく睡る男だなあ。——しかし、奴さん達あ、いつ歸つたんだい？」

「——。」

「おや、まだ君の寝呆けてゐるんだな。——え、しつかりし給へ



「ッたら！」

私は、手を上げて、三作の背を叩く真似をした。

『あ、分明つてるよ。』

三作は、苦いやうな顔をして、蒼蠅さうに言ふ。

『ちや、何故返事をしないんだ？』

『だって僕あ、君と同じやうに酔潰れちゃったから、如何なつ

たか知らないもの……。』

『困るねえ、ちや真個、僕等は思はん失敬をして丁つたんだな

あ。——だが、しかし、いつの間に歸つたんだらう？』

と、呟くやうに言ひながら、いくら酔潰れて前後も不覺に睡

つてゐるとは言へ、歸るのなら、これから歸ると一言位の知ら

して呉れてもよかりさうなものだのに、黙つて歸つて了うとは  
餘程可怪な男だと思ふと、偶と三作が、また酔ッぱらつた結句  
の果て、何か相手の腹立つやうなことを言つて、怒らして了つた  
からではあるまいか、と案じられた。

で、また私は、何氣ないと言つたやうな調子で、さう訊いて  
見た。

『冗談ぢやない、誰が其座馬鹿な怒らしたりするものか。』

『だって、其所が君のとつたから、如何だか怪しいものさ。——

僕が、もう言ひ給ふな、と、あれだけ側から制めてゐるのに、

まだ龜吉だの、龜吉君だのツて、可厭がれば可厭がるほど言ひ

囃す男だからなあ。』



「あれも相手が、眞個捌けた面白い男だったから、よかつたものよ、あれが僕だつたら、承知しやしない。——屹度何か、また面白半分おもしろはんぶんに氣を悪わるうするやうなことを言つたんだらうが？ え、さうでも無くば、あれだけ僕等に對して、好意を以て迎へてゐた男が、一言の斷りもせず、而も黙つて歸つて了ふ理由が無いからねえ。」

と、呑み剩のこしの水を呑みながら叱りつけるやうに言つてると襖ふすまが開いて、色の白い丸顔まるかほの係りの女中が、  
「もうお目が醒めましたとツすか。ホ、ホ、ホ、。——まあ、貴方はんらお兩人とも、ようあれだけお睡みやしとツせえな。」と、妙

な微笑ほほえみを浮かべながら、茶を注いで持つて來た。

「ウム馬鹿ばかに酔よつたものさ、ハ、ハ、ハ、。——だが、彼の先生達せんせいたちあ如何いかにしたい？」

私は、きまり悪く笑ひながら振顧つた。

「あ、お伴れさんどすか、——お伴れさんなら、もう先刻にお歸りやしとツせ。」

と、女中にようぢゆうは、茶を注いながら、呆れたやうに瞞める。

「さうか。もう歸つたんかい。——しかし、何日頃？」

「さうどすえな。かれこれもうお歸りやしてから、三時間にもなりますやろ。」

「何、三時間にも……。」



と、自分ながら、今更驚いたやうに訊き返しながら、あわてて帯の間から時計を抜き出して眺めると、早や七時過ぎになつてゐた。

『ちや四時頃に歸つたんだね。——だが、別に怒つてゐると言つたやうなとはなかつたかい？』

『否え、何も怒つとおゐやサへんどしたが、お歸りやす時に、あの男はんのお方が、「今、起して連れて歸つても可いけれど、しかし、兩人とも非常に悪酔ひしてるやうだから、まあ暫時このまゝにしと置いてやつて呉れ。——そして、眼が醒めたら、例の所に待つてゐるから、直ぐ来るやうに言つて呉れ」と、言つてお歸りやしとッせ。』

『え、何僕等に？……』

私は、女中の聴き誤りではないか、と尠からず不審に思はざるを得なかつた。

『さうぞす。——眼が醒めたら、直ぐ來い、と言つとおゐやした』

『可怪いねえ。ちや何所へ來いと言つてたい？』

『そら、何所とも、別にお所は聴いてやへんどしたけど、しかし唯例の所だけで、もう貴方はんに分明つてるやうに言うておゐやして、——あ、さう違ひない、何かお常ごんに、お手紙のやうなものを預けてお置きやした。』

急に女中は、思ひ出したやうに顔を赧らめて、

『あの、一寸お待ちやしとお呉れやすえ。』と、言ひながらあわ



て、廊下をバツ／＼と駈けて行つた。

「一体手紙ツて、何だらう？ 何うも變だなあ。」

私は、茶を啜つてゐる三作の顔を見ながら、奇異と言つたやうに小首を傾けた。

「ウム可怪いねえ。——だが、其の例の所とか言ふ、家の名前や町名を書いて行つた手紙とは違ふかね？」

「さあ、或はさうかも知れんねえ。——あんな氣輕な面白い男だつたから。」

私も、偶とさう考へた。

「屹度さうだよ。此家にゐるから來て呉れ、と言ふんだらうさ」  
三作は、斷定したやうに言ふ。

「さうだらうか？ 其麼とだつたら、いよく濟まんねえ。さ  
んざ斯うして散財をさして、其のお禮も言はずに、兩人共寢て  
ゐたんだから……。」

「何に、そんなとあ構ふものか。またそれが旅行の面白い愉快  
な所さ。ハ、ハ、ハ、ハ。——何なら、も一度押掛けてやらうぢやな  
いか。」

と、愉快さうに罪もなく笑つて、三作は急に膝を乗り出した。



一〇 馬鹿らしき拾六圓

と、間もなく女中は戻つて來た。

『あの、預けとお置きやしたと言ふのはこれぞすえ。』

と、言ひながら、封筒の上に、「御兩君へ」と、おそろしいほど筆太に書き記した手紙を差出した。

『あ、さうか。』

軽く首肯いて、私が受取らうとする途端、

『ウム僕に見せ給へ。』と、突然三作は、横合ひから手を伸して奪ひ取つた。

そして、單りニタクしながら三作は封を押切つた。

『困つた男だなあ。僕の讀む間が待てないとは……。』

面を喰つた私は、呆氣に取られたやうに吐きながら、敢て取返さうともせず、勝誇つたやうな調子で讀みかけてゐる嬉しさうな笑顔を見てゐると、奇異にも其の三作の明るい面容は、漸次に暗く曇り出して、急に猛獸が激怒した時のやうな唸聲さへ洩した。

え、如何したんだ？ 一体何だ？』

私は、思はず頸を差伸した。

『畜生！ 馬ッ、馬鹿にしてやがる。』

三作の血相は些しく變つてゐた。



「何、馬鹿にとは？」

「ウム、まあこれを読んで見給へ。こゝ、こんな馬鹿にしたを言つてやがるから。」

三作は、腹立たしげに手に持つてゐた手紙を私の前へ投げつけた。

私は、何と言ふともなしに一種の胸騒ぎを感じながら、半ば皺になつた其の手紙を拾ひ上げると、薄墨で自棄からなぐり書きした爲めにか、所々に墨は滲んでゐて、如何にも酔ッばらひが記したものだと言ふとが、直ぐ妙に味へた。

そして、狼狽えたやうに急いで読み出した。――  
「――小生を始め多勢の女共が、思はぬ御馳走にあづかりし

上、御叮嚀にもお結構なるお土産まで下し置かれ、まことに難有く存じ候。實は御兩君の御好意にあまへ、お眼覚めまでお待ち申し上げ、萬々お禮を申し述べべき筈なれど、長坐をしてお妨げ申しては、却つて恐縮の至りと存じ、斯くは失禮をいたせし次第、よろしく御諒察下さるべく候。尙寢小便をしたり、人並み外れた悪戯をしたり、拐帶まですた奴だと仰せ下されし、素丁稚あがりの筈なるべき小生が、斯ることを申し上げるのも、或は横着千萬とかになるやも知れず候へ共、兎に角この女共に送られて、これよりまた一宵の歡を貪ふる爲め、例の戀しい懐しい宿坊へ参るべく候に付、お差問へなくば、何卒御來駕下され度く祈り



上げ候。

尙々小生が、當家の支拂ひ萬端いたすべく思ひしも、それでは御兩君に對して、まことに敬意を失するに相成り候に付、差控へ置き候間、當家への支拂ひは勿論のと、女中達へも、お忘れなく充分に纏頭をお遣はし下さるべく候先は取急ぎのまゝ、如此くに御座候」  
讀み終つた私は、丁度爲に油揚げを攫はれて、遙かに天空より嘲笑されてゐるやう、餘りのとで開いた口がふさがらず、不意に豆鐵砲を喰つた鳩のやう、眼のみパチ／＼させて、呆れかへつたやうに手に持つた其の手紙と、三作の顔とを暫時見較べてゐた。

「如何だ分つたのかい？」

三作は、待ちかねたやうに私の顔を覗きこむ。

「—。」

「え、これには奈何な君も、やはり腹が立つだらうが？」  
「ウム眞個癪だ！」

私は、私知らず奥齒を堅く嚙占めた。……其の瞬間、「お人好しの御兩君へ、——龜吉より」と、圈點まで附けて愚弄したやうに末尾に記し、「ザマ見やがれ、ハ、ハ、ハ、ハ。」と、冷やかに嘲笑ひながら、悠々として逃去つた時の憎々しい顔や、「今頃は兩人とも籠に尻を抜かれたやうな變な面をして、飛んでもない竹筥返しを受けたものだ、と後悔の臍を嚙んでゐるやがるだらう。」と、



愉快氣に手を叩いて、彼の女共と一緒に私達の間抜けさ加減を罵つたり、或は、『ほんまに可い氣味やわ、ホ、ホ、ホ。』と、心から嬉しさに胸を撫で下すと言つたやうな眞似をしたりして祝盃を舉げて勝誇つてゐる例の男や伴れの女共の顔が、まざまざと私の瞳孔に映して、其の笑ひ聲や、罵り嘲けつてゐる聲までが、耳の底に聽えてゐるやうな心地がして、自分ながら奇異なほど動悸が亢進つた。

『一体まあ、如何おしやしたんどすえ？』

斯う女中に訊はれて、偶と私に返ると、いつか知らぬ間に私は、其の手紙を二つに引裂いてゐた。

『何か、お腹の立つやうなとを、彼のお伴れさんが書いてお置

きやしたんどすか』

女中は、驚いたやうにモシ／＼しながら、眼を圓くした。

『ウム、……否や……』

と、應えかけたが、さて女中の顔を見ると、また一種の淡い虚勢と負惜みが胸に湧いて、如何しても口へ出なかつたのみかこの馬鹿にされ愚弄されてゐる事實を語るのは、自分で自分の愚しさを笑つて下さいと吹聴するやうなものだと思はれたから『否や何に、——別に何でもないさ。』と、何氣ないと言つたやうな調子で、曖昧に言葉濁して了つた。

〔211〕  
『さうござるか。でも、えらう何か怒つとおゐやすやうに見えましたが……。』



女中の眼の底には、まだ疑問の色が生きてゐた。  
 「何に、餘り人を馬鹿にしたやうなことを書いて置きやがるからさ。」

と、言ひながら、偶と私は、若しかこの女中が、渠等の連中の一人でも見知つてゐるならばと思つたから、直ぐ調子をかへて、

『しかし何かい、彼の男は、此家の馴染かね？』と、それなしに訊いて見た。

『否え。』

『ぢや、彼の藝妓達の中に、誰か一人でも知つてゐるのがあつたかい？』

『さうござすなあ、何のお方も初めてお越しやしたお方ばかりやと思つてゐるのござすが。——しかし、何でござす？』

女中は、妙な面容をして、反對に訊き返した。

『さうか。否や別に、何でもないけど、僕あまた、始終此家へ來てるのかと思つたんさ。——だが、土産ッて、一体誰が持つて歸つたんだい？』

『それも、やはり彼の男はんのお方が、「土産にするんだんだから、何か美味さうなものを拵へて折に入れて呉れ」と、別に註文おしやしたんござすが……。』

『え、別に註文を？ 馬ッ、馬鹿にしてやがる。』

思はず私は、腹立たしく叫んで、呆れかへつたやうに三作と



顔を見合した。

『いとく、癢だねえ』

三作は、耐えられないと言つた色をして、唸るやうに言ふ。

『ウム眞個馬鹿にしきつてるさ。』

と、一時は腹立ち紛れに自分で自分の胸を掻き撈りたいほどに思つたが、さて翻つて熟く考へると、斯うして馬鹿にしたられたと言ふのも、謂はゞ自分達が勝手に求めて、この渦中に飛込んだやうなものだから、今更怒るのは、却つて自分の愚を表白するやうなものだ、と思はれた。それよりか寧ろ男らしく好加減に諦めて了へ、と心に叫びながら、

『まあ可いや。も斯うなりや仕方が無いから、兎に角僕が勘定

するごしやう。』と、澁々私は、思ひ切つて、女中に勘定書を附けた。

女中は、私の其の態度が可笑かつたものか、暫時怪訝さうに眼を睨りながら、

『さうごすか。まあ、何卒御ゆっくり……。』と、言ひ残して、振顧り、振顧りして出て行つた。

すると三作は、舌打ちをしながら、

『ぢや君あ、奴等の分まで拂ふのかね。』と、今更らしく如何にも残念さうに訊く。

『だつて、仕様が無からうぢやないか。つまらない君あ悪戯をするものだから、こんな馬鹿らしい、飛んでもない目に遭はさ



れるんさ。」

「――」

「僕あ決して、こんな愚弄をしきつてやがる奴等の分まで拂ひたくは無いかれど、斯うなりや僕が拂ふより、仕方が無いぢやないか。」

黙つて三作は、急に俯肯いて了つた。

拾六圓二拾幾錢と言ふ、馬鹿々々しい七人分の勘定をさせられた私は、其家を出るまで、まだ何となく腹立たしく思つてゐたが、地の底に眠つてゐるやうな、静かな夜の暗い街路の、冷

えた大氣が酔醒めの熱つた頬を撫で出すと、漸次に其の湧きあがつた感情の波は静まつて行つて、いつかまた、これから歩を向けて行く、今宵の違つた世界が、何と言ふともなしに楽しく胸に描かれもした。

女中の送り出す聲を門口の感じの好い磨硝子の街燈の下で聴いて、プラクと急ぐともなしに麩屋町を南へ、御池通りを東に歩を運ばして行くど、いつになく三作は、元氣を失つたやうに黙つたまゝ、常に遅れ勝ちに蹠いて来る。――

「オイ如何したんだ？」

斯うなると私は、いきほひ振顧らざるを得なつた。

「ウゝ、別に如何もしやし無いけど。しかし考へると、餘りに



君が氣の毒だから。」

「何が？」

「何がッて、今、君が言つた通り、僕がくだらないをしたので、あんな馬鹿らしい目に君が遭つて呉れたんだから。」

「—。」

「で、僕さへ居らなくば、君も腹を立てるやうなとはあるまいと思ふから、折角此所まで斯うして一緒に來たけど、しかし、僕も考へると馬鹿らしいから、一層のと、これから歸らうかと思ふんさ。」

と、言ひながら三作は、到頭佇留まつて了つた。

「馬鹿な、何を愚圖々々言つてるんだ？」

「だつて眞個、君に對してすまないもの。」

「其麼もう濟んだとは、如何でも可いちやないか。—別に僕が今、それを右左言つてる譯けちやあるまいし。」

「—。」

「まあ兎に角、そんな女々しい拗ねたやうなと言はずに、男らしくさッさと來給へ。—さあ行かう。」

私は、モドかしく思つて、三作の袖を捉へて促した。

「さあ早く來給へッたら。」

「でも、行くとは行くけど。しかし、いつまでも繰返して、それを言はれるのが辛いからなあ。」

「馬鹿。女の腐つたんぢやあるまいし、誰がいつまでも其麼と



を愚圖々々言ふものか。——それよりも、さあ早く來給へッたら」  
 「まあ、さう君が堅く言つて呉れや、安心だけど、しかし、愚痴と言ふやつあ、兎角出たがるものでねえ。」

「何に僕が大丈夫だと言つたら、大丈夫ぢや無いか。——眞個君あ、女のやうな疑い深い、妙な男だねえ。」

私は、餘りのとで腹立たしく感じたから 後も見ず一歩先に  
 行きかけた。

「ぢや、屹度あれについては、もう僕に苦情を言はないんだねえ。」

「執拗いなあ。——さうだよ。」  
 私は、振向きもせず、眞から蒼蠅さうに言葉棄てた。

すると追絶るやうに駆付けて來た三作は、私の顔を覗きながら急に調子をかへて。

「さうか。いや有難い！ハ、ハ、ハ、ハ。——しかし君あ、好い人だねえ。」と、ニタ／＼笑ひ出した。

「何？」  
 「否えさ。君が、もう苦情を言はないと斷言して呉れたから、僕あお芝居の演ちがひがあつたと喜んでゐるんさ、ハ、ハ、ハ、ハ。」

「おや、此奴！」

偶と一杯喰されたと思つた私は、咄嗟ステッキを振上げた。  
 「いや、失敬々々！」



と、笑ひながら三作は、瓦斯や電燈の灯の眩く溶けあうて輝いてゐる、賑やかな寺町通りの方へ、身を翻すなり敏捷く駆け出した。

寺町を横切つて、市役所前の広い静かな街路を東へ、浅い流れの高瀬川近くへ歩を移して来る時分には、馬鹿らしい目に遭はされた今先刻の出来事をお互に忘れ果てたやう、いつか兩人は取留めもない違つた雑談の世界に身を入れてゐた。  
家の周囲を取巻く高塚と、しもた家との續いた薄暗い小路から、殊更高く架けた高瀬川の短い小橋を渡り切ると、直ぐ前面

一体に街燈の灯影の色鮮かに列なつた片側のみ、深い眠りに落ちてゐるやうな静かな木屋町の夜が擴がつて、また其所には謂はゞ玩弄品のやうな小さな電車が、暗く暮れた高瀬川の流れを驚かしながら、のろ／＼と静かに走つてゐる。

私は、電車の走つてゐる木屋町の不調和を感じるよりも先づ自分の衣の裾に火のついてゐるを更にお覺り遊ばさぬ世の道學者先生や、重箱の隅のみをほいくつて一廉の功名顔をしてござるカーベルのお役人さま達が、眉をお盛めになるやうな、人生の所謂罪惡が、甘みに引付けらる蟻のやうに集ひ来る人々によつて、常に奥深く而も昔より今にかはらず、夜となく晝となく繰り返されては演じられてゐる奇妙な木屋町の通りへ來ると



「姦淫罪」や「賭博犯」てふ嚴しい文字の制裁の餘りに無かつた税のかゝらぬ芳釀美縁に陶然とし、誰憚ることもなく管をまきながら千鳥足で縫うて行けた往昔の、のんびりした町へ急に紛れ込んだやう、いつも言ひ知れぬ懐しさと、戀しさを感ずるのであつた。

橋だもとより南へ反れた私は、左手の方に列なつた檣並の薄暗く輝く街燈を、昔の行燈の灯影のやうに感じながら、町一面に漂うてゐる一種の頹廢的な心地好い匂ひに包まれて、今宵泊らうと思ふ馴染の宿の方へ、急ぐこともなしに歩を移して行つたが、京都の市街の地理を更に知らない三作は、絶えず怪しみの眼を敬て、もの珍らしげに四圍を陶ししながら、ともすれば遅

れ勝ちになつて躓いて来る。

聽て宿の表口まで来た私は、十間ばかり遅れてゐる三作の追付くのを待つて、奥まつた細い路次の、敷詰めた甃石を踏鳴らしながら、竹の細い格子戸を開けて、小さい棕櫚竹が片隅に植はつてゐる、玄關口に佇んだ。

まだ案内を乞ふ聲も出ぬ間に、奥の方から驅けて来る慌しい甃音が聽えて、直ぐ玄關の電燈の灯影を受けた白い障子が中から開かれた。と同時に、見覚えのある女中のお勝の白い柔かな曲線を見せた顔が現はれて、

『あ、お越しやす。——まあ誰方はんかと思つたら、まあ、まあお珍らしい。——さあ何卒……。』と、仰山さうな表情を眼と口許



に浮べながら、愛想よく出迎へた。

私は、軽く首肯いて、

『ちや、兎に角通していたゞきますかなあ。』と、殊更酒落るやうに言ひながら、お勝に導かれて、三作と共に、お定まりの奥の八疊へ通つた。

二 更けた木屋町の夜

待つ間もなく茶が運ばれて、挨拶に来た女將の、私達を何所までも外さぬと言つたやうな、肝高い聲の底に懐し味と親し味の溢れたお世辭や、賑やかな笑ひ聲が消えて、急に水を打つたやう、一先つ座が前のやうに静まると、私の座つてゐる斜の方に對座をした三作は、薩摩杉の美しい木目を見せた天井の中央より吊された電燈の薄紅い灯影を受けて、一種言ひ知れぬ繊細な情緒の漂うてゐる、何となく奥床しいと言ひたいやうに、よく整うた室内の作らへ方や、床の間の飾りつけを、今更らしく



妙な眼の色を光らせて、キヨロくと陶しながら、  
「見掛けによらない、なか／＼乙な家だねえ。」と、單り感心し  
たらしく言ふ。

「ウムさうかい。君みたいな男にでも、やはり世間並に乙だな  
んてとが解るんかなあ、ハ、ハハ、ハ、ハ。——だが。昨夜の嵐山と  
比べると如何でげす？」

と、冷かすやうに笑ひながらも私は、三作の感心したやうな  
満足らしい面容を眺めると、何となく一種の肩身の廣さと、淡  
い自誇を感じずにはゐられなかつた。

「まあ、さう言つたもんちや無いさ。最初から言つてる通り僕  
あ、この木屋町ッて所すら知らないんだから。——しかし、一体

此所の家なんかへ来る客あ、如何言ふ客筋だね？」  
三作は、いつになく真面目な顔をした。

「さあ、さう真面になつて訊かれると一寸一口にあ説明が出来  
無くなるけれど、まあ概して、お娛しみ筋が多いだらうよ。」

「成程。——さうだらう、今、此室へ来た女將さんだつて、並一  
通りの垢抜けとは違ふと思つたからなあ。で、何かい君あ、此  
家を古くから知つてるんかい。」

「ウム別に、古くからッて譯けでも無いが、四五年前からの馴  
染さ。——あの、ほら、慥か君に一度紹介したとのある、ほら、  
XX會社の取締役とXX日報を有つてゐた廣井ね、あれが此家の  
女將とは昔からの馴染で、よく遊びに来てゐたから、それで僕



も、京都へ来れば此家で泊るとになつたんさ。』  
 『さうか。ちや可成古いお馴染さまなんだねえ。』  
 『まあ、さう言や、さうだけど。しかし、この邊一体は、宿屋  
 であつて其の實、体のいゝ待合なんだから、無論一現の客あ泊  
 やし無いし、また何だせ、昨夜みたいに電氣を消したり柄の悪  
 いとをして呉れちや、君を伴つて来た僕が、眞個困るよ。』  
 私は、偶と昨夜の困らされたを思ひ出したから、あわてた  
 やうに、さう注意をしたから、廣井のまだ飛ぶ鳥も落さんずの  
 全盛時代に、或關係から、よく案内されて此家で一緒に遊んだ  
 時分に、渠の漆黒な八字髻の口から聞いた女將に就ての、——繩  
 手の或茶屋に仲居をしてゐて、其家の出入りの藝妓の弗箱を横

合から寝取つて、其の藝妓と飛んだ活劇を而も四條の御旅町で  
 演じたとの逸話や、祇園町切つての羽振利きの仲居であつたと  
 や、今、私達を玄關口に出迎へて、此室へ案内して来た女中の  
 お勝に就て、この前、慥か今年の正月の末に来た時、寒や寒い  
 雨に朝から閉籠められて、所詮無さの餘り起上がりもせず欠伸  
 を嚙占めながら、炬燵の上で單り其の日の新聞や、持つて来た  
 雑誌の拾い読みをしてゐると、其所へ晝飯を運んで来た、も一  
 人の女中のお勢に、偶としたとから、——いつも見受けるお勝の  
 ふっくりにした柔かな色白な顔が、其の時に限つて見えないまゝ  
 如何したのかと訊くと、お勢は、黒目勝ちな美しい眼を怪しく  
 光らせながら、



「何もかも知ッとおるやす癖に、根性の悪い、まあ……。」と、仰山さうに言つたが、皆目何も知らない私は、却つて其の何か斯うお勝に就ての深い意味と秘密のありさうな、其のお勢の表情なり口吻に軽い興味と好奇心を湧かせて、真個何も知らないが、一体如何したんだ、と、思はず乗出して、尙も執拗く訊ねると、彼女は、幾度びとなく、「ほんまに彼の事をお知りやへんのごすか。——貴方が、それをお知りやサへんとは、妙ごすえなあ。」と、まだ疑ひの雲が晴ぬやうな顔で駄目を押しながら、「そしたら言ひますが、斯うしてお勝どんが山科の實家へ歸ッとおるるのは、嬰兒はんが生きたからごすえ。」と、言ふから、私は、奇異に思つた。と、言ふのは、其の前、丁度昨年十一月

月の中旬過ぎに来て、四五日此家で滞在をしてゐた時、其のお勝が私の係りであつたが、そんな急に兒を産みさうな態度も見えなかつたばかりか、また懐妊してゐると言つたやうな素振が、可成女に對する或種の觀察力と鋭感を有つてゐる私の眼に微塵も映じなかつたから、反對に今度は私の方からお勢の其の言葉を疑り出して、さう何もかも其の時見たとも言つて、尠からず怪しみながら訊くと、

「そら、さうごすとも。この前貴方はんのお越しやした時にはまだお勝どんも四月か五月のお腹ごしたさかい、なんぼ貴方はんが偉かつても、——またお勝どんも隠せるだけ隠しておゐたさかい、人に知れるやうなとはおへんわ。」と、澄して言ふので、



私は、いよく怪しまざるを得なかつた。假に其の時お勝が五月の腹を隠し了うしてゐたにしても、それから二ヶ月経つか過たぬのに出産するとは、餘程奇怪なとだ、これや眉に唾が必要だわい、と思つてゐると、彼女は何に感じてか腹立しげに、

『ほんまにお勝ごんは、見掛けによらん悪性ごすえ。まあ、貴方はんの前で這麼を言ふのやおへんけれど、まあ聴いとお呉れやす。暮からお正月の貰いの多い時だけ、自分勝手に戻つて来て、松の内が済むと、また病氣やと言つて實家へお歸りのごすえ。そら、まあ彼のお勝ごんは、此家の開業時分からおる仲居はんどごすさかい、其の位な氣儘をおしても可いやうなものごすければ、私も一度實家へ歸りたいし、また期うして寒い

と直ぐ僕麻質斯が起つて、毎年私が困ることを知りながら、斯うして歸つとおゐるんどごすさかい、餘まりやと思つてるんどごすわ』と、訴へるやうに永々しくお勝に對する苦情を並べ立てたが、

肝心の問題の其の出産に就ては、更に説明をしないから、いよく私は、此女自分の腹立ち紛れから、飛んでもない嘘を吐きやがるわい、と考へたが、しかし、嘘なら嘘だと綺麗に白状させて呉れようと思つて訊くと、

『其の嬰兒はんどごすさかいな。そら其のすつと前から彼のお勝ごんは、子宮が悪いンごしたさかい。五月目の、忘れもしまへんが丁度あれが十一月の末に、此家で自然流れて了うたんどごすえそれから實家へお歸りたんどごす。——それがまた〇〇新聞の



探訪者の耳裡に入つて、其の新聞の「廓だより」に載つたもんどすよつてに、一時はえらい評判どしたえ。」と、言つて聴かしたので、漸く合點は行つたものゝ、さて其の胎した相手は誰であらうか、と思つてゐると、彼女は自分から膝を進まして、

「其の男はんは、貴方知つとおゐるやすやろが？」と、噪いだやうに言ひながら、

「彼の廣井の旦那はんも、ほんまにお勝ごんには酷い目にお遭ひやしたんどすえ。後で聴くと纒一度か二度ほど戯事おしやしたんどすが、それでも彼の旦那はんの胤やと言うて、養生するお金をウンとお取りたさうどすが。しかし、其のお金は皆右から左へ、前、大阪の文樂に演ておゐた良さんと言ふ、瘡ぎすな

願の短い、淨瑠璃の三味線弾きの、前からの情夫はんに入揚げてお了ひたのどすえ。」と、晝飯を喰ひながら聴いた其の時の話などをしてゐると、今度は其のお勢の可怪い病癖のあるとを知つた古い記憶が、偶と頭腦に浮かんだので、——さうでなくも三作が落着いて聴いて呉れると言ふ嬉しさから、いつか知ら話の興に乗せられた私は、

「まだ先刻から、此室へは如何したとか、一度も顔を見せないが、其の他此家には、斯う言ふ女ばなれのした珍な女があるんだせ。」と、噪ぎながら、思はず三作の前へ膝を進ました。

ど、言ふのは、例の廣井に此家へ四五度び案内されて、辛つと此家の顔馴染になつた時分の、——それは初秋の涼し微風の吹



く或日の黄昏であつた。

廣井は、例によつて自分の愛妾と言つたやうにしてゐる、祇園町の美代香と言ふ細面の藝妓の膝を枕にして仰向けに寝そべりながら、遊び疲れたやう、どんより濁りた鈍い眼で、忙しく漸次に薄暗い黄昏の色を濃く塗つて行く東山の空の方を眺めてゐたが、偶と何に感じてか、ムク／＼起上がりながら、

『如何だい君。——君も、一つ京都で嬉しいのを拵へちや如何だい？ え、若しか其麼氣があるんなら、この僕ら夫妻は、能ふ限り犬馬の勞を執つて見るがねえ。』と、突然私に對つて言ひ出した。

『ハ、ハ、ハ、まことに結構な、光榮至極なお沙汰ですわねえ。

ハ、ハ、ハ、。

『否や君！ 嘘ぢやない、眞劍だよ。ね、斯うして遠來の珍客を遇するに、いつも吾輩は、君に見せびらかしてばかりゐるんだから、眞個それぢや君に對して敬意を失するし、またそれでは僕も、餘りに野暮天になるからねえ。——で、誰か、君のお氣に召したやうなのがあれば、及ずながら御推薦申し上げやうと思ふのさ。』と、言ひながら、側にゐる美代香の顔を見て、

『え、お前もさう思ひはしないかね？ それにこの男は、まだ可哀想到事實の鰥夫さんで被在やるから、誰か、妓が無いだらうか？』と、言ふと、美代香は、急に乗り出して來て、印象に富んだ黒目勝ちの眼を睨りながら、



「貴方はん、そらほんまにどすかいな。」と、眞面な色をして私に訊く。

「え、そんなとが出来るものなら、ほんまに結構どすがね、ハ、ハ、ハ。」

私は殊更洒落るやうに笑つた。

「そしたら、ほんまに屹度どすえな。」

「え、さうですとも。屹度どすとも。——だが、生憎僕みたいな男にあ、相手になつて呉れる其麼慈善深い女が、世間にあり

ませんからなあ。ハ、ハ、ハ。」

「おほらしい。其麼どがおすかいな。——貴方はんの其の好い咽喉の歌澤一つお聴かしても、何の女はんかて、真ぐどすわ。」

と、噪ぎながら、丁度自分の運命か何ぞに直接の大關係でもあるかのやう、また廣井と向合つて、時々偷むがやうに私の顔を眺めながら、其の候補者の人選に、彼妓でもない、此妓でもないと言つて、荐りに話し合つてゐた。

其の時。——自分の携げて来たウヰスキーの大壺を單り勝手に平げて、尠からず酔つぱらつてゐた私の眼に、偶とお勢の婀娜ッぽい面長な、人を魅するやうな懐ッこい笑顔が映つたので、——さうでなくも此家へ來始めた最初から、路傍の女でないと言ひたいやうな、いつもお勢の顔を見ると、他の女と言葉を交す時と違つた一種の懐しい羞耻を感じてゐたのだから、其の酔ひの與へる方を藉つて笑ひに紛らしながら、同じ御推薦の光榮



に浴せるものなら、小便臭い妓よりは一層彼のお勢をね……。こ  
半ば冗談のやうに装うて言つて見た。

すると如何したとか、廣井も美代香もお互に顔を見合せて、  
遽に腹を抱えんばかりに吹き出した。

が、冗談のやうに言つては見たものゝ、それが私の心の底で  
は真面目なだけ、テレくさいと言ふよりも、体よく侮辱された  
やうに感じられ、思はず頬を赧らめて、兩人の視線から顔を反  
けざるを得なかつた。

兩人の笑ひは續く。

私は、いよく馬鹿にされてゐるやうに感じて、むしやくい  
やしてゐると、

「君あ、彼の評判を知らないのかい？」と、笑へるだけに笑つ  
た廣井は、唐突に言ふ。

私は何の評判か、と思つた。

「ハ、ハ、ハ、。否や君が知らんのも無理はない。——あれや君。  
評判の寝小便屁れだぜ！ ハ、ハ、ハ、。」

「え、何、寝小便屁れ？」

「さ、それがだ。僕も最初は、人の悪口だとばかり思つてゐた  
んだが、しかし、其の事實も見だし、また此所の家でもそれが  
爲め寝る室も蒲團も皆別にしてるぢやないか。——また其處とで  
もなければ、君が思ひつくまでもなく、彼れだけの容貌を有つ  
てゐるものを、如何して人が棄て、置くものか、僕だつて、そ



れさへ無ければ、疾くの昔に可愛がつてゐるからねえ。」  
 と、笑ひながら、美代香と共々に、お勢が今日まで幾度び縁  
 付いても、いくら情夫や旦那を持つても、それが爲め、いつも  
 愛想を盡かされて、未だにあゝして奉公をしてゐるのだ、と話  
 されて、尠からず興醒めのした時のなどを、さながら自分の  
 記憶の底から湧き出たやう、懐しい追憶に心を浸しながら、こ  
 れほど俺は、この木屋町通だと言はぬばかりに永々と話して聽  
 かした。

すると三作も、いつになく私の其の長い話を茶化しもせず、  
 最と興味ありげに、絶えずニコ／＼しながら耳傾けて聽いてゐ  
 たが、聽て私の其の話が終ると、待ちかねたやうに、

「ウムなか／＼面白いとがあるんだねえ。——だが、京の女に  
 して寢小便するものがあるとお、馬鹿に揮つてるぢやないか。  
 ハ、ハハ、ハ、ハ、と、單り嬉しさに笑ひながら、『しかし、さう聽  
 くど何よりも僕あ、其の寢小便屁れるお勢とか言ふ女の顔が、  
 一度見たいものだが、見えるだらうか。』と訊く。  
 『それや見えるさ。——だが言ツと置くが、僕あ此家へ始ツ終  
 來るんだから、それを聞いたからと言つて、ヤレ流産の、ヤレ  
 寢小便の言つて貰ッちや、實際困るからねえ。』  
 偶と私は、興に乗つて三作みたいな男に、悪いとを喋舌つた  
 ものだと思つた。

「馬鹿な、誰が其麼とを言ふものか。」



だつて怪しいもんさ。罪も無い人にすら、兎角赧い顔さすとの、就中好きな君のとだからなあ。』  
『否や大丈夫だよ。君の迷惑になるやうなとあ、決して言やしないから。』

と、真顔をして三作が言つてゐる所へ、

『えらいお待たせしましたえな。』と、注文して置いた幾品かの御馳走を黒塗の廣蓋に載せて、昨年の十一月の末に流産した其のお勝が、色白な頬に和かな微笑を漂はしながら入つて来た。そして、次の室の方から、紫檀の餉臺を重量さうに両手で抱え込んで来て、私達の對座してゐる中央へ置据ゑて、廣蓋の上の盃洗や御馳走を其の餉臺の上にならべてゐると、直ぐ其の後か

ら、強く頭髪を結上げた可愛い雛妓のやうな顔をしてゐる小婢が、奈何にも厳しく睨られて、人怖をしてゐると言つたやうに闖越しに恐々叮嚀に手をついて、銚子を持つて来た。



## 二 質のドクトル先生

直ぐ酒は始まつて、四五度び銚子が、其の小婢の手によつて取かへられた時分には、快い酔ひが、私の胸に溢れ出すと共に酌をしてゐるお勝や、三作の眼のまわりをぼうツと紅く染めてゐた。

私達が、まだ此室へ腰を下さぬ前から聴えてゐた、幾室かを距てた隣座敷の賑やかな、妓達の浮々した笑ひ聲や、酔つた客の騒ぎが消えて急に四圍が静まると、此邊一帶に建てつゝいた客の遊樂のみを専らにする家の座敷から、潮時の過ぎた宴席の

どよみや、忍んでゐるやうな三味線の爪弾が、閉て切つた此室の障子の外に静々流れてゐる加茂川の清冽な水の嘯音に交つて何所からともなく遠く幽かに響いて来る、更けた木屋町の春の夜の艶かしい氣持が、酒杯のやりとりをしながら無駄話に耽つてゐる、此室に漲つた。

酒杯の數が重なるにつれ、お勝も三作も酔へば、漸次に私も深い酔ひの快い世界に導かれて行くと共に、絶間なくお互の口から洩れる駄洒落や、賑やかな罪もない笑聲が、更けて行く靜かな四邊を顛はした。

『あ、お越しやす。——まあ、まあお賑やかなこと。』  
斯う驚いたやうに言つて、例の寢小便のお勢が、幾室かを距



てた隣座敷で騒いでゐたお客を送り出して来たものか、薄暗い次の室の方から、軽く會釋をしながら、酒に微紅染のた面長な人を魅するやうな、懐ッこい笑顔を始めて現はした。

お勢の顔が現はれると、何と言ふともなく、また一段の賑やかさが増して来たやうに思はれて、いよ／＼酒の興は、快く私の胸の底を撲つた。

『や、被在やい！——そこは端近、いさまづこれへ……。』

『うむ然らば、免しやれ。』

斯うお勢も、私のそれを受けて噪ぎながら、急に取つて付けたやうな面白い身振までして、お勝の坐つてゐる側へ来た。

『ハ、ハ、ハ、これや感心、なか／＼巧い！結構それなら直

ぐ今日から女優になれる、ハ、ハ、ハ、。』

私は、譯けもなく笑つた。

『さうですやろ、なれますやろが。』

『ウム大いになれるさ。だが、帝劇や文藝協會などのとは違ふよ。』

『そしたら何所の女優にぞす？』

『さうだね。』

——呉服屋に三拜九拜して、辛つと月賦で賣下げて貰つた、それも綿入り御召の着物を、これ見よがしにベロベロと嬉しさうに着て、洋傘か空氣草履一足ぐらゐで、いつ何時でもお客の求めに直ぐ應ずる、あの大阪の、××の女優になら行けると言ふのだよ。』



と、私が笑ふにつれ、側のお勝も吹き出した。

「あほらしい。あんな××の可怪な女優になら、彼方からお頼みやしても此方がお断りごすわ。」

と、共に笑ひ崩れながら、私の手から渡す酒杯を受けてゐたが、偶と心付いたやうにお勢は、黙つて煙草を吹してゐる三作を顧見た。そして、何か自分の記憶を呼び起すと言つたやうに小首を傾けた。——と、突然、

「私、先刻から、この旦那はんのお顔を、よう知つてるやうに思ふのごすけれど、ごないしても思ひ出せんのごッせ。」と、獨言のやうに頓狂な聲で言つて、尙もお勢は、三作に對つて、薄氣味の悪い眼を敬てた。

「何、この男を知つてゐるッて？　ハ、ハ、ハ、そりや何かの思ひ違ひだよ。」

「何故にごす？」

お勢は、怪訝な顔をした。

「何故にッて言はれると何だけど、君が知つてさうな筈が無いさ。——この男は、今日始めて京都を知つたぐらゐだから。」

「さうごすか。しかし、そらほんまごすかいな。」

「事實さ。それにこの男は、四五日前に辛つと日本へ歸つて来たんだから、無論君の思ひ違ひだよ。」

「そしたら私の考違ひごすやるか。しかし、日本へ歸つてお出でやしたとは、あの、洋行でもしておゐるやしたんどごすか。」



『さうさ。顔こそ、お見掛け通り這麼お粗末な、狎が風邪でもひいてるやうな變な面をしてゐるけど。しかし、年齢のわりすと、なかく感心な男だよ。——自分で學資を作る爲めに働きたながら、永らく獨逸の大學で勉強し、日本の醫學博士と同じやうな肩書を今度貰つて來たんだからねえ。』

尠からず酔ひのまわつてゐる私は、調子に乗つて、思はず出鱈目な嘘をまことしやかに言つた。

『まあ、さうごすか。』

驚いたやうにお勢が眼を睜るにつれ、黙つて聽いてゐた側のお勝も、感心したやうに今更らしく三作の顔を見る。

私は、澄しこんでニヤ／＼笑つてゐる三作と顔を見合せて、

耐えられぬほど可笑く思つてゐると、突然お勢は、

『貴方はん、ほんまに其の獨逸とか言ふ西洋の國へ行つとおるやしたんどすか。』と、三作の前へ心ほど膝を進ました。

『—。』

『ほんまに行つとおるやしたんどすかいな。』

『え、行つてたんです。だが、我々の研究したのは、日本の大學なんかでやるのとあ餘程違ひますからね。』

黙つたまゝ煙草のみ燻らしてゐた三作は、急に何か思ひついたり、いつにない落着いた重々しい調子で、意味ありげな微笑を浮べた。

『さうごすか。如何違ふのどす？』



「さ、如何違ふと訊かれたツて、素人にあ分らないけど。まあ早く言や、日本の醫者だと診察一つするにも脈を檢たり、胸を叩いたり、舌を見たり、いろ／＼雑多なとをした上に、まだ一々其容躰まで聽いて、それで辛つと薬を與へるのだが、僕らが獨逸の大學で研究して來たのは、其塵古い診察法とあ全然違ふのです。」

「へ、そしたら如何してお診やすのぞす？」

お勢の顔は妙に動いた。

「如何ツて、そう言はれると、それも一寸説明し難いが、しかし、僕の研究して來た或まあ新しい方法で診察すると、もう其麼馬鹿々々しいことをせずとも、チャンと其の病氣が何病であ

るか、一目見れば分明のさ。」

「ほんまに？」

「さうさ。ほんどに分明さ。そして大概の病氣は、今までのやうに無暗に薬を服まさずして癒すんだからねえ。——しかし、それとも姐さんは何所か病いのかい？」

「へい、否え。」

——けど、そんななら一度診お呉れやツか。」

お勢は、曖昧な返事をしながら、暫時三作の顔と私の顔とを見較べてゐたが、何に感じてか、急に噪いだやうに自分から乗り出して來た。

「ウム頼むとあれば診て上げてても可いがね。」

——だけど、つま



らないから、も其麼ことあ廢さうよ。」

「何故にぞす？」

「さうぢやないか。今日僕あ、此家へ診察に来たんぢやあるまいし。また見受ける所、別に病氣らしくもないからねえ。」

「そら、さうお言やしたら、さうぞすけれど。しかし、其麼こと言はんと、お願ひぞすさかい、一度診てお呉れやすな。」

お勢は、甘へるやうに言ひながら、ツト起つて三作の側近へ座りかへた。

「困るねえ。」

三作は、敷島の吹あましを火鉢に突込みながら、奈何にも當惑したと言つたやうな殊更表情を見せて、薄氣味悪くチロ／＼

と私の方を偷み見る。

それを見てゐる私は、思はぬことから、飛んでもないことになつたものだど、座にゐたゝまらぬほど擦つたい心地になつて、思はず吹き出しかけたが、しかし、一度三作に診察の眞似をさすのも却つて一興だと思つて、何喰はぬ顔をしながら、尙も黙つて敷島の輪を吹いてゐた。

三作は、私が見て見ぬふりをしてゐるので安心したもののか、急に思ひ切たと言つたやうな表情をお勢やお勝に見せながら、

「ぢや、仰せ通り診さしていたゞかね。ハ、ハ、ハ。」と、付けたやうに笑つてゐずまいを改めた。

「嬉し。——そしたら診てお呉れやツか。」



お勢もかすまいを改めた。

『ウム診て上げやう。——ちや、早く兩手を出し給へ。』

斯う言ひながら三作は、お勢の兩の手首を取上げた。そして殊更しかつめらしく装うて、素直に兩手を前へ差伸してゐるお勢の顔をシロく覗きながら、手掌を見たり、また裏返しては手背を眺めたりしてゐたが、偶と何か心に思ひあつたかのやうな調子で、

『オヤ、こりや妙だ？ こりや可怪い！』と、單り眞面目らしく呟くやうに叫んで、尙もお勢の細面な顔や、柔かな肉の色を見せた兩手を奇異さうに瞠めながら、何か深く考へ込むと言つたやうに小首を傾けた。

『え、何でござす？ 何が妙ござす？』

お勢は、兩の手首を握られたまゝ、怪訝さうに三作を見返した。

『イヤ眞個妙さ。僕あ、診誤つてる筈は無いと思ふのだけぞ。

何うも今、僕の診た所ぢや、君が他に隠してゐる病氣があるやうだがね。——しかし、如何だい。君にあ何か其麼病氣があるだらう？ え、違ひなからうが……。』

『如何だい。儘にさうだらうが？ え、他に言はれない病氣があるだらうが。』

『否え。——しかし、如何して其麼ことが分明んどす？』



「きまり悪げに俯首いてゐたお勢は、曖昧な返事をしながら、驚いたやうに眼を圓くした。」

「そりや分明さ。また、それ位のこと分らないようぢや、永らく獨逸で苦しんだ効が無からうぢやないか、ハハ、ハハ。——だが、もう一度眞に診て見なければ確としたことは言へないが今、僕の診た通りの病氣の程度だつたら、屹度癒して上げられるがね。」

「え、ほんまに？」

「さ、それがさ。一度反應試験をして見た上でなくば何とも言へないし。また、僕が今日こんなことがあるとは夢にも思はなかつたから、其の試験薬を持つて來なかつたが。——しかし、

今、其の試験がして欲しいのなら、赤インキを持つて來給へ。赤インキさへあれば、充分それが分明さ。」

三作は、偶と思ひついたやうに言つた。

「赤インキで、あの字を書く赤インキごすか。」

「さうさ、持つて來るんなら、一緒に筆も持つて來給へ。直ぐ試験して上げるから。」と、言はれて、お勢は、イソ／＼として出て行つた。

お勢が出て行く後から、お勝はお勝で、また同じやうに診て呉れと言ひ出した。すると三作は、仕方が無いと言つたやうな面容を見せて、勿体らしく装ひながら、また同じやうな例の調子で、お勝の兩の細い手首を取上げた。そして暫時お勝の顔を



シロく覗きながら、手掌を見たり、また裏返しては、手背を眺めたりした結句、先刻私が話して聴かした子宮病であると言ふことを、奈何にも自分が診察して知つたかのやうに澄しこんで言ひながら、

『これ位の病氣なら何方にしたつて楽だよ。今の姐さんのやうな天性の病氣だと一寸癒し難いが。——しかし、まあ待ち給へ今、赤インキを持つて來たら、一緒に反應試験をして上げるから。』と、呑み込み顔をして親切らしく言ふと、さうでなくも煙にまかられてゐるお勝は、唯もう驚いたやうに三作の顔を瞞めながら、

「嬉し。——さうですか。そしたら何卒……。」と、真からに

こやかな色をして、幾度びとなく、其の反應試験とか言ふものをして呉れと頼んだ。

『あ、いゝよ。序手だから一緒にして上げることも。』

と、言ひながら三作は、勝矜つたやうな嬉しさうな色を湛えて、チロ／＼と私の方を見る。

私は、餘りのことで思はず顔を反けたが、それでも三作の殊更澄しこんでゐる顔や、またそれを真に受けて、いゝ玩弄品にされてゐるとは夢にも知らないお勝やお勢を思ふと、馬鹿々々しいと言ふよりも、寧ろ興あることのやうに思はれた。で、尙も笑ひを耐へながら、單り酒杯を傾けては、それとなしに眺めてゐると、



『あの、このインキで可いのですか。』と、慌しげにお勢は、手に赤インキの小壘と筆とを持って駆け戻つて来た。

『ウムここれで可い。』

斯う言つて三作は、其の小壘を電燈の灯に透して見ると言つた態をしながら、軽く首肯した。そして兩人を自分の前に引付けて、例の薄氣味の悪い微笑を漂はしながら、

『ちや、一緒に反應試験をしたげるから、兩人共早く兩手を出し給へ。』と、事も無げに促した。

『へ、兩手を。何でですか？』

お勢は、不審さうに訊咎めながらも、お勝と共に兩手を前へ差伸べた。

『何でツて、ちや君あ、も診て欲しくもないのかい？——診て欲しいんなら、やはり僕の言ふ通り、さうして兩手を出して居らなきや不可ないさ。』

『けんど、如何おしやすんぞですか？』

『さ、それが見と居れば、今直ぐ分明んさ。だが、厭やなら廢すよ。僕あ、いそ邪魔な反應試験なんか、實、したくあ無いんだから。』

『否え、そんなこと言ふてやへんのぞすわ。私のお訊きしてるのは、其の赤インキで如何おしやすんぞですか、と言ふんぞすが……。』  
『ウムこのインキでかい。それや何でもないさ。唯このインキを兩人の兩の手背へ塗つて、それで病氣を診るだけだから。——』



まあ、兎に角黙つて僕に任しと置き給へ。決して悪くはしないから。』

と、單り呑込みをしながら、手早く小塚の栓を抜いた。そして筆に生々した赤インキを含ませるだけ、たっぷり含ました。

『ちの可いね。塗るよ。』

三作は、兩人の首肯くを見て、面白く言つたやうな例の狡猾な光りを、皆の下つた眼一杯に湛えて、偷むがやうにチロチロと私の方を眺めながら、殊更澄した顔をして、お勝の方から塗りかけた。と、見る／＼お勝のふっくらした色白な兩の手背は、さながら五臟六腑を抉つて鮮血に染られたやう、生々した赤インキが一杯に滴つて見えた。

『まあ……』

それを見たお勢が、今更驚いたやうに眼を圓く睜る間に、早や三作の赤インキの筆は、同じやうにお勢の兩の手背の滑かな皮膚の上を赤く染めてゐた。

其の瞬間私は、もう耐えられなくなつて、ツト顔を反けるなり、加茂川に面した方の障子を展けて、欄干へ出た。――

『君の鼻渣を呉れないか。え、薬を明日やらう、と彼塵に約束をしたんだし、また彼塵にまでお芽出度く騙つてゐやがるんだから、僕のと一緒に丸薬にして、明日の朝にでも嘔してやらう。』



ぢやないか。——屹度喜んで嘸むに違ひないから面白いぢやないか。え、呉れ給へッたら。」

と、さんざお勝やお勢を玩弄品にして、これほど面白いことはないと言つたやうに單り腹を抱へて喜んでゐる三作は、酒の座が果て、私が寢て了つてからも、まだ寢やうともせず、夜具の上座に座り返りながら、蒼蠅く揺り起してゐるが、私が其の返事をしないので、倦み果てたものか、幾度ぶか舌打ちをして何か小聲で呟きながら、いつの間にか酔ひ潰れた人のやう、罪もなく寢て了つた。

「今、石鹼で洗うて來たんごッけんご、この通り、まだ剃イへんのごッせ。」

と、皮膚の底に赤インキの滲み残つてゐる兩手を見せながらお勝が夜具を敷伸べて呉れるについで、かひなくしくお勢が閉めて呉れた雨戸の外に加茂川から、更けた春の夜の比叡嵐の冷えた寒風が、何所からともなく寢てゐる私の膚にしつとりと滲み入ると共に、路次外の街路を南北に駈け去つて行く電車の大地に残して行く響や、運轉手が自棄に踏鳴らすけたまじい警鈴の音が、手に取るやうに強く枕に響いて來る。

私は、また寢返りを打ちながら、甘い微な鼻を立て、いかにも軽く寐入つてゐる三作の何事も忘れ果てたと言つたやうな寝顔を覗き込むと、また先刻の腹を痛くした可笑味が、何と言ふこともなく胸一杯にこみ上り、我知らず吹き出せた。よくも



這麼顔をして、あんな馬鹿々々しいいたづらが眞面目らしく出  
 來たものだ、と思ふと共に、あるまいことか兩手に赤インキを  
 塗られながら、まだそれで弄られてゐるのだとも知らず、一途  
 にこの男の言ふ口から出まかせの嘘、——これ位の病氣なら何  
 でもないさ、薬一服で屹度癒してあげる、と言ふ馬鹿らしい嘘  
 を眞に受けて、幾度びかお禮を言ひつゝ、其の薬を呉れとまで  
 頼んでゐたお勝やお勢の心から嬉しさうな顔を思ひ浮べると、  
 誰かに自分の脇腹を擦られてゐるやうに思はれた。  
 が、それにしても先刻三作が單り喜んでゐた通り、果して其  
 の薬に似せた鼻渣の丸薬を嚥むであらうか、と考へると、それ  
 を嚥されるお勝やお勢の氣の毒さを思ふより、三作が、それを

巧く嚥さうとする明日の日が、この上もなく面白いやうに思は  
 れると同時に、斯うしたたはいもないお茶番旅行が、渠の爲め  
 に、まだ三四日もつゞげられるかと思ふと、何も知らずに其の  
 相手をなさる世間様こそ飛んだいゝ御迷惑だが、しかし、それ  
 を傍觀しやうとする私の胸には、何と言ふこともなく、それが  
 面白くも楽しく描かれた。……



大正二年十月十五日印刷  
大正二年十月二十日發行

(悪戯旅日記)  
(定價金五十五錢)

著作者

深尾 葭 汀

發行者

森 重 太 郎

印刷者

荒木 佐 兵 衛

大阪市西區阿波座中通三丁目四番地

不許複製

大阪市南區四ツ橋南詰東入

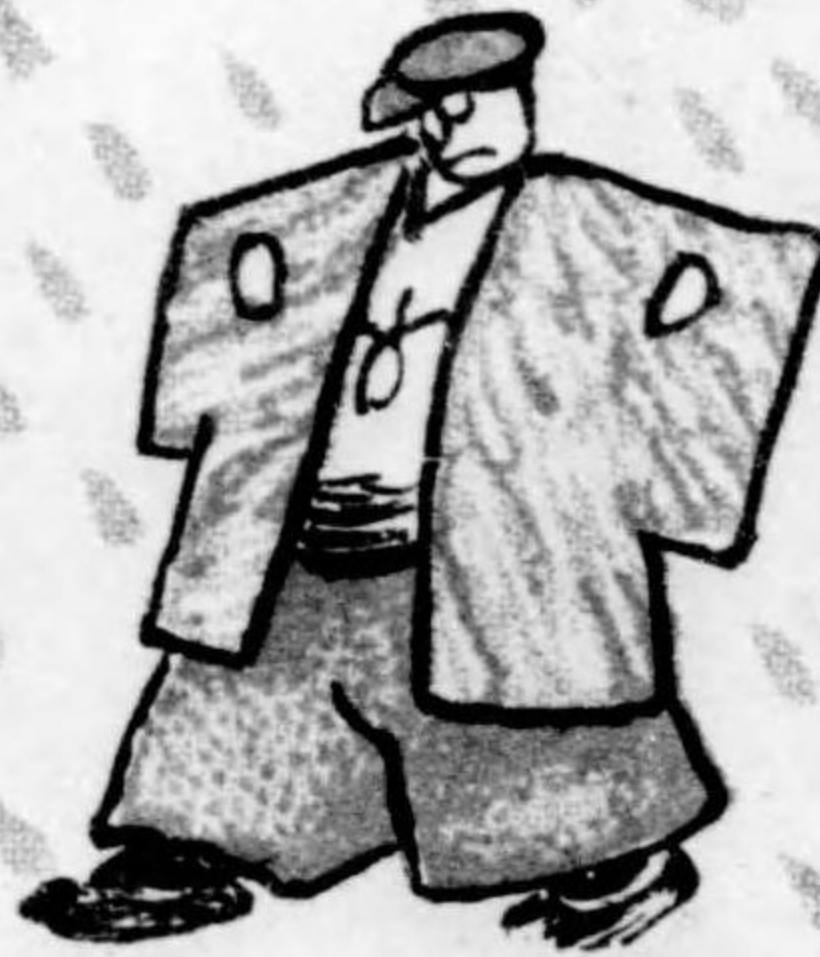
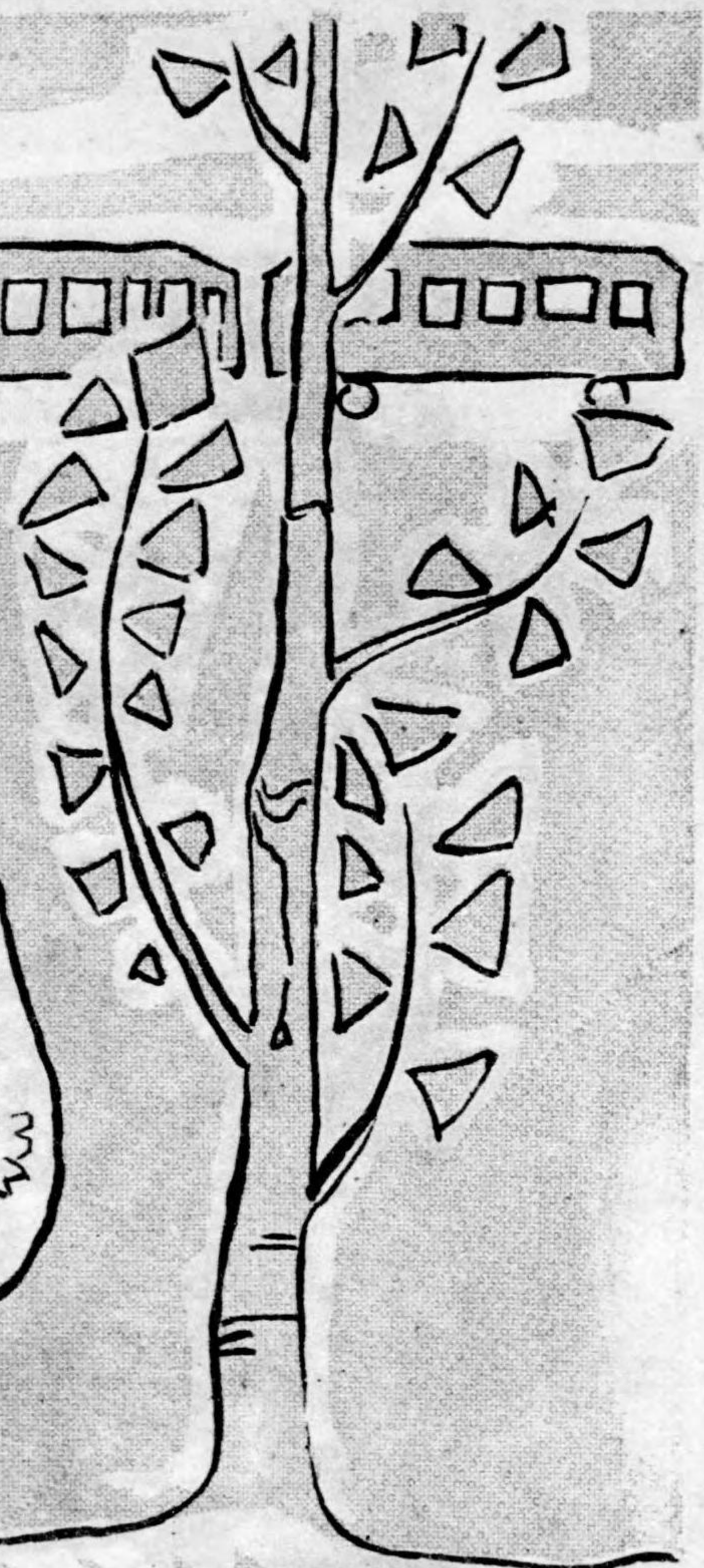
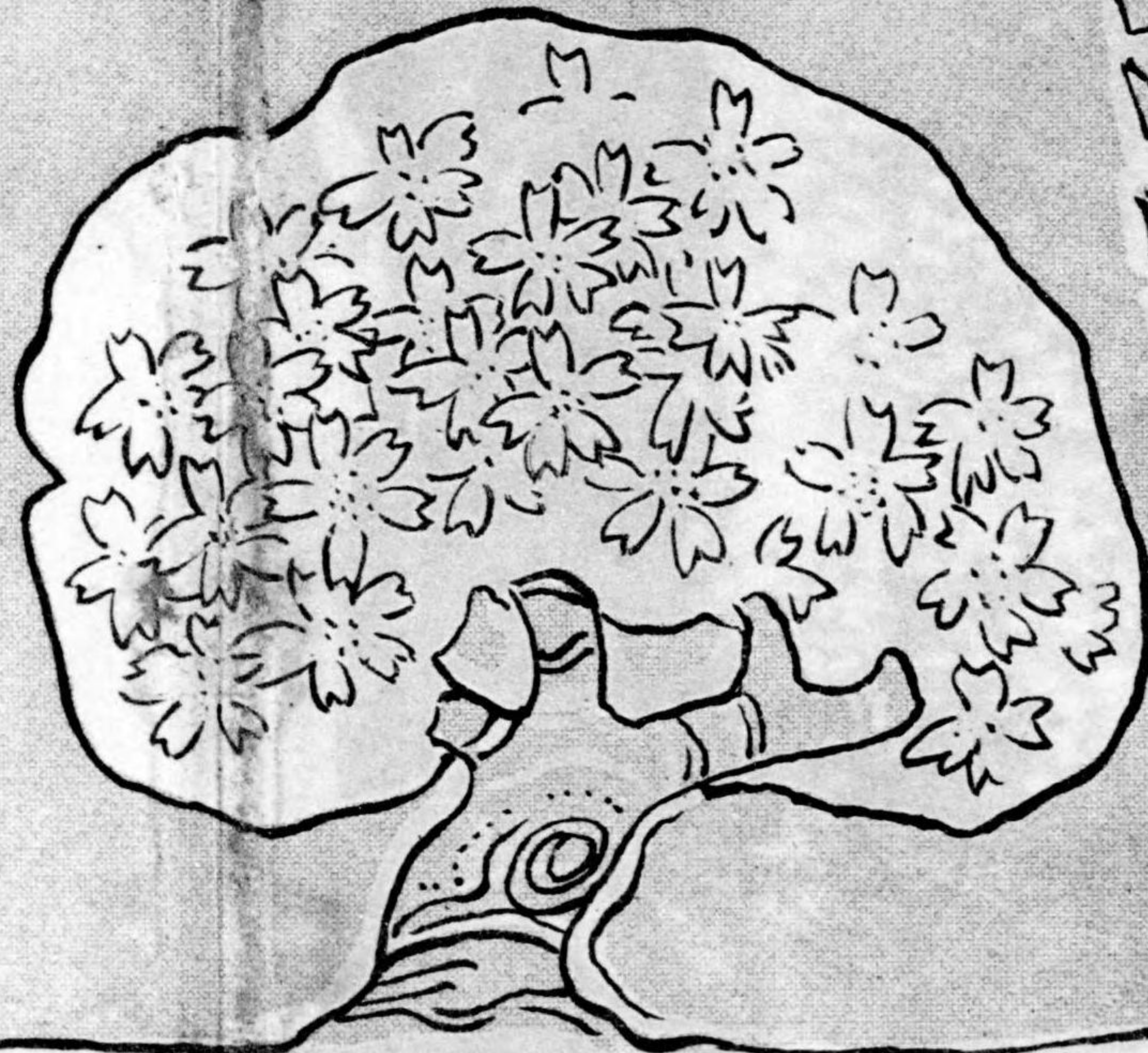
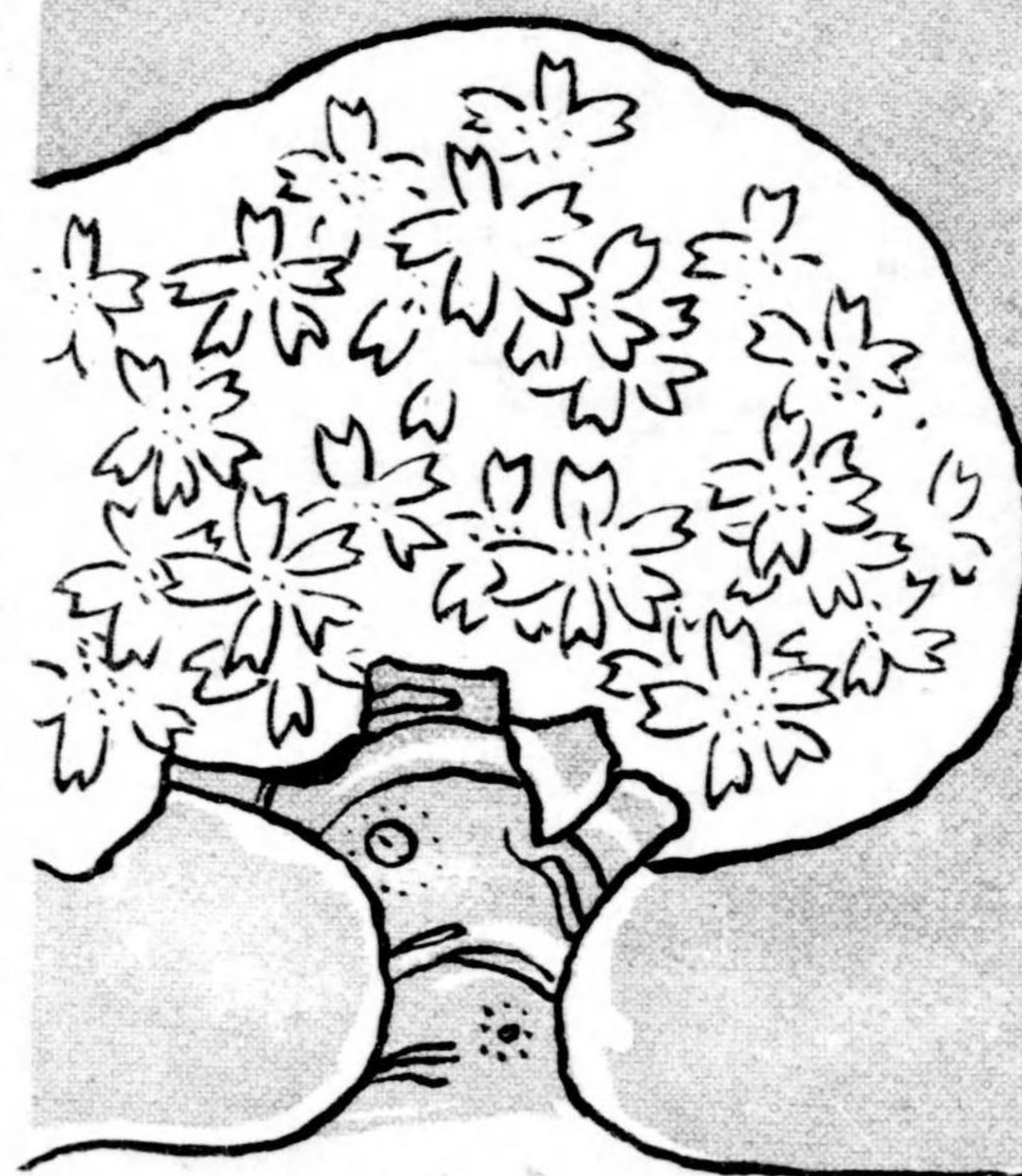
森 精 美 堂

振替大阪二一四二三番

發兌元



272





終

